

これからの図画工作科において育てるべき力の分析とその方略に関する研究

—育てる力に対応した導入時の短時間活動「トライアル」の開発—

大野 寛人

Hiroto OHNO

Analysis of Learning and Development Through Short “TRIAL”

as an Introductory Activity in Elementary school Art lesson.

【 要 旨 】

本研究では、図画工作科の最終目標は「本当に豊かな情操を養うことか」という見解にたち、図画工作科だからこそ「育てるべき力は何か」を探った。特に、「形」や「色」といった造形要素を扱うことが教科固有の特性であることから見つめ直し、表現・鑑賞どちらの活動に取り組む上でも土台となる「形や色をとらえ、イメージを持つ能力」を育てることに着目した。この力をもとに、子どもたちが表現活動で抱える問題である「発想したことが表現できない」ことに対応する授業の方略「トライアル」を開発した。授業の導入時に、表現技法や方法を知る・試す・考える「トライアル」の有効性が授業実践より明らかになってきている。

【キーワード： 共通事項 造形的な見方 教えること 試す活動 トライアル】

I 研究の目的と方法

1 問題の所在

今日の教育では、「学力重視」が叫ばれ、国語、算数、理科、社会といった教科に注目が集まっている。こうした学力の向上を図ろうとする動きに対して、学力を数値化しにくい図画工作科は、「育てる力」が客観的に見えにくく、教科としての位置づけが軽視されている。そのため以下のような問題を抱えており、これらを改善する必要がある。

(図画工作科は、これ以降、図工と表記)

(1) 教師にとって分かりにくい図工

「育てる力」が客観的に見えにくいことは、授業者である教師に分らなさを生み出している。

現場では、図工に対する様々な捉え方やずれが生じている。そのため、目指すことが異なる様々な授業スタイルが存在している。また、多くの教師は、どのような指導や評価をすればよいのか分からず、困っている問題がある。

(2) 子どもにとって分かりにくい図工

子どもは、図工は「好き」だけど「将来役立つ」とは感じていないことが意識調査¹⁾等から見えてきた。図工に対する子どもの有用感とは、学年が進むにつれて下がる傾向にあり、他教科と比較するとその低さは顕著である。活動は楽しいが、何を学んだか分からないことは問題である。

(3) 「教えること」が存在しない学習内容

図工は、子どもの主体性や作品の面白さに目を向けた「題材」の検討はあるが、子どもの発想や表現を支える技能等に目を向けた「題材」の検討はあまりない。結果、子どもが表現活動で以下のような問題を抱えても、教師は、明確な指導や支援ができず、子どもの困り感に対応できていない。

- ・何をつくればいいのか発想できない
- ・発想したことを具体的に表現できない

このような、図工の問題点から、図工で「育てるべき力」や図工で「教えること」を明確にし、子どもが、学びの成果を実感できる授業へと改善する必要性を感じている。

2 研究の目的

本研究は、上述した図工の曖昧さから生じる教師や子どもが抱える問題に向き合い、その改善策として「図工で育てるべき力」の明確化と「育てる力に対応した授業の方略」を見いだすことを目的とする。

まず、「豊かな情操を養うことが、図画工作の最終目標か」という見解にたち、図工固有の特性に立ち返って、「育てるべき力」を明らかにする。

その上で、「教えることを明確にした」授業を目指し、具体的な授業の方略として考えている「表現技法や表現方法を知る・試す・考える活動」を開発し、実践を通して有効性を探っていく。本研究ではまず、高学年の活動の開発を試みる。

3 研究の方法

上述した研究の目的にもとづき、本研究では、図工で育てたい力を文献や先行研究などから分析する理論研究と、それに基づいた高学年における導入時の短時間活動を開発・実践・検証する実践研究を行う。研究の全体像を項目化すると以下のようなになる。

- 現行学習指導要領や先行研究から、図工の曖昧さや育てる力を分析、調査し、特に重視すべき「育てたい力」を見いだす。
- 図工で育てるべき力に対応した、導入における短時間活動の開発を行う。(高学年版)
- 図工で育てるべき力に対応した、導入における短時間活動の実践・検証を行う。(高学年版)
- 現場での実践に向け、短時間活動の改良を行う。

II 図工で「育てるべき力」を明らかにする

1 育てる力を分析した結果 見えたこと

図工で「育てるべき力」を明確にするために、現行の学習指導要領や先行研究を調べていった。

結論から言えば、図工の「育てるべき力」は、調べてみても曖昧だということが分かった。

教科概念に、昔から変わらない「美術の教育」と「美術による教育」といった2面性があること、「感性」や「情操」をはじめ、「感受性」「創造性」「新奇性」「個性」など、目に見えず分かりにくい能力を求めていることなどが分かった。

これらの能力については、本田(2005)²⁾や神野(2012)³⁾が「どのように形成されるのか社会的に合理されたセオリーは今だなく、美術教育による成果

など上がっていない」とまで指摘している。

学習指導要領や先行研究を分析する中で、図工の育てたい力が曖昧である理由が見えてきた。

○図工で唱える育てたい力と実際の授業に距離がある。形や色に向き合う子どもに、実質的な力を育てていない現状がある。

○育てたい力は、子どもが見いだすものと考え、「教えること」が、授業に存在しない現状がある。

そこで、本研究では、次の2点を、図工で具体的にすべき点として掲げた。

〈その1〉

表現や鑑賞を通して育てる力よりもまず、表現や鑑賞をする時に、子どもが発揮すべき力を見いだすこと。

〈その2〉

「教えること」を明確にした学習を目指し、その方法を見いだすこと。

2 活動の中で子どもが発揮すべき力を見いだす

〈その1〉表現や鑑賞をする時に、子どもが発揮すべき力を見いだす

(1) 注目すべき3つの能力

子どもが発揮すべき力を考える上で注目したのが、「共通事項」、「造形的な見方」、「造形言語(ビジュアルリテラシー)」の3つである。この3つは、言い方は違うが、共通した能力を育てることを目指している。

その能力とは、学習指導要領に新設された「共通事項」⁴⁾が求める「形や色の特徴や感じをとらえ、イメージをもつ能力」である。

この能力を新井(2012)⁵⁾は、「造形的な見方」と命名し「形や色、材質などの造形的な観点に基づいて視覚情報を整理、分析し解釈することである」と定義し、「〈描くこと〉や〈つくること〉と〈見ること〉や〈見て考えること〉を結びつけ、〈造形的な目〉を育てることが、今改めて求められている」と重要視する。

この能力は、遠藤(2001)⁶⁾が定義する「形・色・材といった造形要素を表現や鑑賞の手段として用いる造形言語(ビジュアルリテラシー)」を獲得するために、その土台として欠かせないものであると考える。

(2) 形や色をとらえイメージをもつ能力に着目

3つの能力は、共通して、以下の点を強調する。

- ①表現にも鑑賞にも共通に働き、必要にして不可欠な、造形活動の最も重要な土台となる能力
- ②自分の思いを表す・伝える上で、または他者の表現を見る・読み取る上で有効となる能力
- ③自然に身につくものではなく、学習で教えることが必要となる能力

そこで、本研究では、「形や色の特徴や感じをとらえ、イメージをもつ能力」を「育てるべき力」として指定し、この力を高める授業方略を考えることとした。

3 「教える」ことを明確にした学習を目指す

〈その2〉「教えること」を明確にした学習を目指す、その方法を見いだす

(1) 「教える」、「獲得する」ことを位置づける

「形や色の特徴や感じをとらえ、イメージをもつ能力」は、自然に身につくものではなく、学習で教えることが必要だとしている。

図工は、「教えること」が希薄な教科である。

以下のような教科の特性が原因であると考えられる。

- ・子どもの発想がすべての出発点となり、作品ができるまでの過程を子どもに任せることが多い。
- ・正答はなく、答えは子どもの数だけあることから、学習内容に「何をつくる」はあっても「どう、つくる」は要求しない。一步間違えれば、答えは何でもありとなる。

このことについて吉田(2002)⁷⁾は、「行き過ぎた児童中心主義」と呼び、「他教科において展開している高度な内容に比べて、図工の内容や目標が低すぎたり乏しかったりする」と問題視している。同様に金子(2002)⁸⁾は、「美術の学習内容は子どもがつくるという論」と呼び、「教育内容を低次化・拡散化するため、教育実践としても理論としても難問にぶつかることになる。教育内容は子どもがつくるとすれば、子どもたちに託すものは漠然とした過大な期待しかない」と指摘する。

問題の所在で述べた、子どもが表現活動で抱える、「発想したことが表現できない」という問題は、このことに関連するであろう。

この問題は、子どもが、発想を表現につなぐ手段(すべ)をもっていない事が主な原因である。

しかし、このつなぎの部分を獲得する授業が、これまで行われてこなかったことが、そもそもの原因だと考える。

そこで、子どもの表現を支える「技術」や「知識」を明確にし、授業に、「教える」または「獲得させる」学習場面を位置づけることを考えてみた。

(2) 発達段階を考慮する必要性

技術や知識を「教える」または「獲得させる」学習場面は、どの学年にも設定するのではなく、現段階では、高学年に適した活動であると考えられる。

これは、

- ①高学年の表現の質的な変化
- ②それに伴う発達段階に応じた指導の必要性

に着目したからである。

① 高学年の表現の質的な変化

高学年が「発想したことが表現できない」と感じる理由は、低学年とは異なる。高学年は、発想したことを、ただ表現することには満足せず、「自分の思い通り」に表現したいという思いが強くなる。そのため意図した表現にならなければ、「発想したことが表現できていない」と感じるのである。

このような高学年の表現の質的な変化について天形(2010)⁹⁾は、「自らのイメージした世界が他者にも理解され、何を表そうとしたのか伝えることにも意識が向くようになる。伝達という目的が生じる表現の大きな転換期である。彼らの空間認識のイメージ通りに描きたいと思う気持ちが強くなる。」と分析している。

② 発達段階に応じた指導の必要性

高学年の表現の質的な変化を考慮し、新井(2006)¹⁰⁾は、高学年には、これまでの自然発生的な活動だけでなく、「芸術に関する知識技能の習得の必要性」を提案し、その一方法として、色づかいや構成など「造形に関する文法」を学ぶ機会を与えることを提案している。

そこで本研究では、発達段階に応じた指導を考慮し、高学年に対応した「教える学習」の具体的な学習活動を開発することとした。

(3) その子なりの見方・感じ方を大切にする

高学年に対応した「技能」や「知識」を獲得する学習活動の開発にあたっては、作品づくりのために、特定した技術の紹介や訓練にならないよう配慮すべきである。

この学習活動は、川路(2010)¹¹⁾が述べる「図工の目標は素晴らしい作品をつくる能力を獲得することではない」ことにもとづき、「その子なりの感じ方、ものの見方や直感的なとらえ方にもとづく表現や鑑賞活動を指導者が大切にすること」を重視する。

そこで、子どもたちに出会わせる「表現技術」や「表現方法」を、「この表現技法はこうやってできます。こういう時に使いなさい」と教えこむのではなく、「こういう表現技法がある。これは〇〇な感じがするから、△△な思いが表したい時に使おう」といった、その子なりの感じ方ができるように、取捨選択できる幅を活動にもたせたい。

これまで述べた(1)～(3)を考慮して、高学年に対応した「技能」や「知識」を獲得する学習活動のポイントを以下のように考えた。

- ①子どもの発想と表現の「つなぎ」となるように色や形でできる「表現技術や方法」,「作例」を教師から提案する。
- ②教えこみではなく、その子なりの見方や感じ方ができるように、選択の余地をつくる。複数提示をしたり、試したりする工夫をする。
- ③学んだものをその後の表現活動で活用できるように、取り入れるタイミングを考慮し、授業の流れを考える。(導入時、色をぬる時等)

この活動は、年間を通して実施し、子どもの表現を支えるべく、より多くの表現技術や表現方法に出会わせたい。

この活動を「トライアル」と命名し、以降、詳しく説明する。

Ⅲ 「トライアル」の開発

1 「トライアル」とは

「トライアル」という言葉は「試しにやってみること。また、試しにやったもの」という意味をもつ。この意味を利用して、高学年に対応した、「技能」や「知識」を獲得する学習活動を「トライアル」と命名し、その開発を行った。

前述した、高学年に対応した「技能」や「知識」を獲得する学習活動のポイントを考慮し、「トライアル」は、教師から提案する「表現技法」や「表現方法」を、子どもが「①知る、②試す、③試したもので考える」3つの活動に取り組み、実感を伴った獲得ができることをねらっている。

①～③の活動は次のように考えている。

- ①クイズ等で、まずは自分なりに考える活動
- ②自分で考えた方法で実際に試してみる活動
- ③試した技法がもつ感じや特徴を考える活動
技法がもつ感じや特徴を使ってみる活動

子どもに与える表現技法や方法は、造形要素の中でも、特に、「色」「形(線)」「構図」の3つに関わるものから選出した。これは、子どもが発想を表現する手段として、まず目を向けさせたい造形要素だからである。第一段階としてまず、高学年のA表現領域「絵に表す活動」に関するトライアルを開発し、今後、「立体に表す」や「鑑賞」のトライアルを開発する。

2 「トライアル」に期待する教育的効果

「トライアル」を取り入れることで、子どもが表現手段となる表現技法や方法を獲得する、それを後の表現活動に生かす学習の流れができる。子どもが学習を通してステップアップする要素が図工の学習に生まれることとなる。「トライアル」には以下のような、教育的効果があると考えられる。

- 学習で着目すべきことが明確になる。
- そのものがもつ「特徴」や「感じ」を自分なりに解釈し、その子の造形的な見方が培われる。
- 新たな表現技術や表現方法が獲得できる。
且つ、自分に合うものが獲得できる。
- 自分のイメージに適した「表現技法」や「方法」を選択、活用する表現手段になる。
- 表現の「形」や「色」に自分の意図が生まれる。
- 他者の感じが読み取れ、鑑賞の手がかりになる。
- 教師が、子どもの表現の意図を形や色で探る事ができ、指導や評価が明確になる。
- 他の題材でも、表現手段として活用できる。

3 他の方法との比較から見える特性

子どもの「発想を高める」、「発想したことを表現につなぐ」ための指導方法として、一般的に以下のようなものがある。

- A : 「参考作品」を見せる
- B : 自分の「題名」を考えてからはじめる
- C : 主題や対象のもつ感じを「言語化」する
- D : 素材や表現方法に出会わせる

これらは、自分の主題や描きたい感じを、子どもが明確にする点で有効である。

A:「参考作品」を見せることは、子どもに完成のイメージがもてる点で有効である。しかし、着

目させる点が曖昧であれば、ややもすると模倣におちいる可能性も含んでいる。

B：自分の「題名」を考える，C：主題や対象がもつ感じを「言語化」する方法は，自分のイメージや印象を言葉に置き換えることで，発想や構想が明確になる点では有効である。

しかし，表したい感じを言葉でイメージできても，それを形や色で表すとすると難しい。言葉とそれに合う形や色は，まだ距離がある。どうやって発想と形や色をつなぐか。その「どうやって」の部分をつなぐ役割が「トライアル」である。

トライアルは，D：素材や表現方法に出会わせる活動の一種である。上述したようにトライアルは色や線を試すだけでなく，③試した技法がもつ感じや特徴を考える，簡単に試してみる活動を取り入れている。③の活動を取り入れることで，技法の形や色がもつ特徴や感じをとらえることができ，その特徴や感じが，自分のイメージを表現する上で一手段となることを実感できると考える。

「トライアル」では，「知る」，「試す」に加え，特に，「試したものがもつ感じを考える」「その感じを使って簡単なものを試す」という活動を強調したものとしていきたい。

4 「トライアル」で扱う内容

本研究では，高学年A表現「絵に表す活動」における「トライアル」を次のような内容で検討している。造形要素は，「色」「形」「構図」の3つを取り上げる。このことは発想を表現する上で，まずは，「色」「形」「構図」に着目させたいと考えたからである。それぞれの造形要素に関する「トライアル」は次の通りである。

(1) 「色」に関するトライアル

① 色いろいろトライアル

…混色や濃淡による色づくりを試す

step 1 3原色でできる混色づくり

step 2 水の混ぜ具合による濃淡づくり

step 3 ○○にそっくりな色づくり

② ペイントトライアル

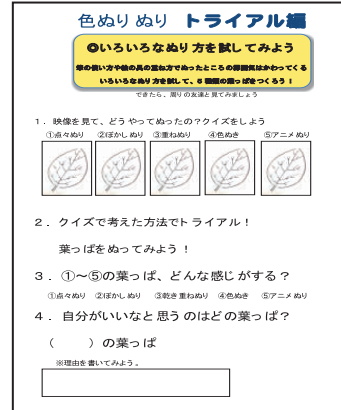
…多様な道具で様々なぬり方を試す

step 1 絵の具の着色技法【図1】
(絵の具と筆による様々なぬり方)

step 2 絵の具の着色技法
(筆以外による様々なぬり方)

step 3 絵の具以外の着色技法 (絵の具以外による様々なぬり方)

【図1】絵の具の着色技法トライアル試作版



(2) 「形」に関するトライアル

① 線いろいろトライアル

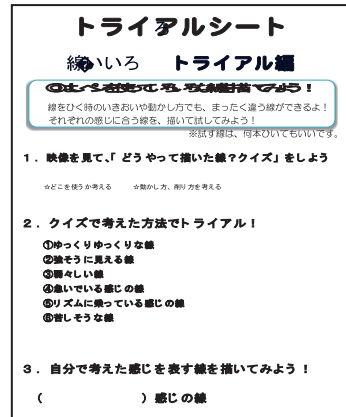
…様々な線，様々な道具の線を試す

step 1 箸ペンによる様々な線づくり【図2】

step 2 絵の具による様々な線づくり

step 3 ○○による様々な線づくり

【図2】箸ペン等 様々な線づくりトライアル試作版



② 描き描きトライアル

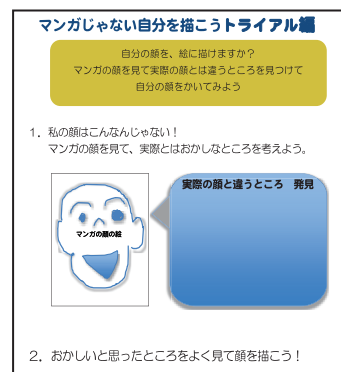
…様々な絵の描き方を試す

step 1 対象を見ないで・見て描く【図3】

step 2 対象を左手で描く・右手で描く

step 3 対象を長丸と丸で描く

【図3】対象を見ないで・見て描くトライアル試作版



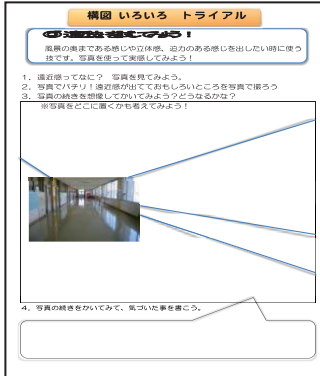
(3) 「構図」に関するトライアル

① 遠近トライアル

…遠近感・奥行きなどの構図を試す

step 1 遠近感・奥行きをだす方法【図4】

【図4】遠近感・奥行きをだすトライアル試作版



② 配置いろいろトライアル

…配置の方法や配置の印象を試す

step 1 ○○を使った配置の方法

step 2 バランスを考えた配置の方法

(5) 単元をこえた「トライアル」の活用

また、「トライアル」の足跡を保存するものとして、「トライアルポケット」と称する単語カードや、ファイルを準備し、単元をまたがって、子どもが獲得した技能や感覚を活用できるようにしたい。

IV 「トライアル」を取り入れた授業実践

本研究では、「トライアル」を取り入れた授業実践を行い、想定した教育的効果を検証することや「トライアル」の有効性を探り、現場での実施に向けた、さらなる改良に取り組むたいと考えた。

1 検証の視点と方法

検証する視点は以下の通りである。

- ①「トライアル」は子どもが意欲的に取り組める活動であるか。
- ②「トライアル」は、子どもが表現する「色」や「線」に造形的な意図や工夫を生み出し、イメージを表現する上で支えとなるか。
- ③「トライアル」は、教師の指導や評価が明確になるか。

検証の方法は以下の通りである。

- ・事前・事後調査のデータの数値を比較する。
- ・ふりかえり等の「トライアル」に関わる記述を抜きだし、教育的効果の具体を探る。
- ・抽出児童を選出し、事前・事後のデータの数値比較作品、記述から変容を探る。

2 研究対象の実態

(1) 実態調査の方法

- ・対象は、S県のY小学校6年生17名
- ・「絵に表す活動」に関する、意識調査を実施。
- …発想する、表現、鑑賞に関する意識、教わることに対する意識等を問う。
- ・事前と実践授業後の調査を計2回実施。

(2) 実態調査の内容

事前調査項目【一部抜粋】(5件法による)

(①はい②まあ、はい③ふつう④まあ、いいえ⑤いいえ)

1. 図工は好きですか
2. 「絵をかく活動」は好きですか
3. 「発想」についての質問
 - (1)絵をかく時に、「アイデア」は、ぱっとうかぶか
 - (2)「アイデアをうかべるコツや方法」を教わりたいか
4. 「下がき」についての質問
 - (1)「下がき」自分の思い通りにかけている!と思うか
 - (2)「下がきをかくコツや方法」を教えてもらいたいか
5. 「色ぬり」についての質問
 - (2)筆を使って、思い通りのぬり方ができますか
 - (3)色ぬりは、自分の思い通りの色になった!と思うか
 - (4)「色のつくり方」や「ぬり方」を教えてもらいたいか
6. 図工の授業のやり方についての質問
 - (1)「新しい方法やコツ」を教わって、それを使って絵をかいてみたいか (自由記述もあり)
 - (2)図工は自分で自由に考えたり、絵をかいたりする事ができる時間だと思うか (自由記述もあり)

(3) 事前調査の結果から分かること

事前調査の数値結果は、以下の通りである。

- ・図工や絵をかく活動が「好き」と答えた子は9割。1割の子は、「好きではない」と答えている。
 - ・「発想」に関しては、2割の子が「ぱっとうかぶ」、6割の子が「まあうかぶ」と肯定的な回答が多い。
 - ・「下がき」を思い通りにかくことが「できる」と答えた子は2割。「色ぬり」は「できる」と答えた子は4割。他の項目に比べ肯定的な回答が低い。
 - ・「下がき」や「色ぬり」に関して、その方法やコツを教わりたいと答えた子は9割。反面、1割の子は教わりたくないと答えた。
- 【教わりたくないと答えた子どもの理由】
- …教わらず、自分のアイデアでやってみたい。
 - …教えてもらっても自分の思い通りにならない。
 - …教えてもらったことは覚えていないと思う。

事前調査の結果から、対象学級の実態を以下のように考える。

- ・「発想」することは、何とかできると感じているが、「表現」することは、自分の思い通りにあまりできていないと感じている。
- ・表現のすべを教わり、それにもとづいて活動する学習方法をしてみたいと考えている。
- ・反面、「教わりたくない」と感じる子どもおり、その理由は「自分でやりたい」、「教わってもできない」とタイプが異なる。

この事前調査をから、以下のような3つのタイプの抽出児童を選出し、事前・事後の変容から、「トライアル」の効果の有無を見ていく。

- A：表現に自信が持てないタイプ (①⑥⑧⑩)
 (描く、色ぬりが思い通りにできないと感じている子ども)
- B：「教わること」に抵抗があるタイプ
 (「トライアル」等で技法や方法を教わりたくない子ども)
1. 自分ですべてやりたいから教わりたくない (⑩)
 2. 教わってもできないから、教わりたくない (⑧)
- C：A表現に自信がもてず、B「教わること」にも抵抗があり、図工が好きでないタイプ (⑧)

3 授業の実際

(1) 授業の概要

- ・題材名「墨で表すこんな気持ちやあんな気持ち」
 (高学年絵に表す活動)
- ・実施日 11月20日、28日 (全4時間)
- ・研究目標
 導入において、表現方法や技法を試す活動を取り入れることは、子どもたちが発想したことを表現する手だてとなり得るか検証する。
- ・題材目標
 絵に表す活動における感情的イメージを線や形で表すことができる。
- ・主な活動
 - ①墨の濃淡(色)や筆などでできる様々な表現技法(形)を知る・試す・考える「墨の技法みつけトライアル」
 - ②墨の特性や表現技法を使って、「自分の気持ちを絵に表す」活動

(2) 「墨の技法みつけトライアル」の内容

「墨の技法みつけトライアル」は、墨のできる技法を「知る・試す・考える」中で、発想を表現する手段となる「造形的な技能」を獲得させる。

造形的な技能として、以下のような色、形、構成に関わることを想定し、自分なりの「造形的な見方」ができるよう「トライアル」を設定した。

- ・色 …水の含ませ方を変えることのできる、墨の濃淡
- ・形 …用具の動かし方、使い方のできる様々な線や形
- ・構成…墨の濃淡や線の組み合わせ方、リズム、動き

また、「知る・試す・考えること」の3つを大切にし、以下のような活動を設定した。

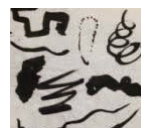
- ・知る…この線どうやって?クイズ
 (筆などの線を提示し、どうやって描いたか考える)
- ・試す…いろいろな線 トライアル
 (実際にこうだろうと考えた方法で試してみる)
- ・考える…「〇〇な感じ」カードをつくろう
 (トライアルで試したものを使い簡単な創作をする)

なお、本題材の「トライアル」は、パワーポイントにより視覚的に提示しながら進行した。

(3) 各学習場面における子どもの作品

(第1次 11月20日)

- ①「ウォーミングアップ」教師の指示に合わせて、線をひく



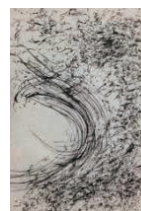
- ②「トライアル」技法「かすれ・とぼし・濃淡・回転など」



【技法 とぼし】

【技法 かすれ】

- ③「感じカード」教師が示す5つお題に合うカードづくり

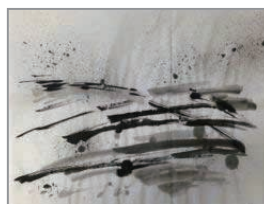


【不思議な感じ】

【勢いがある感じ】

(第2次 11月28日)

- ④「気持ちを表す絵」気持ちを、墨の線と色で表す抽象画



【おだやかで静かな気持ち】

【いい感じで優しく激しい気持ち】

4 実践の結果と考察

(1) 検証の視点①について

「トライアル」は子どもが意欲的に取り組める活動であるか。

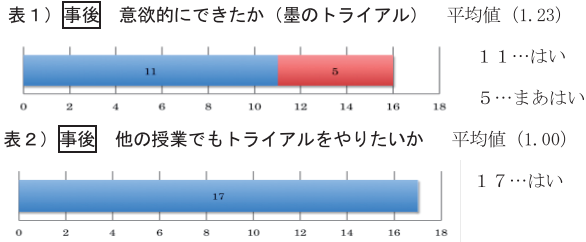


表1の「意欲」に関する数値結果から、「教わる」活動に抵抗を示した子どもを含め、どの子ども「トライアル」に意欲的に取り組めたことが分かる。

また、表2の数値結果にあるよう、他の授業でもトライアルをやってみたいと全員が考えており、子どもに有効な活動であったことがうかがえる。

意欲的に取り組めた要因については、以下のような活動の「よさ」を感じた記述から読み取れる。

〈トライアルのよさに関わる記述より〉

- A: 表現したい気持ちに合う方法を考える事が、楽しかった。
- B: トライアルは、面白いだけでなく、厳しく、ちょっと難しい事があったから、とても分かりやすくて楽しかった。
- C: ためになる事をやったので、今まで以上に図工が楽しかった。
- D: 表現の方法が分かってもっと図工が好きになりました。

子どもは、「トライアル」に対して、「考える」「ためになる」「分かる」という印象をもったことが読み取れる。また、B児のように、「厳しく、ちょっと難しいこと」に、「分かりやすさ」や「楽しさ」を見いだせたことも「トライアル」のよさであると感じた。

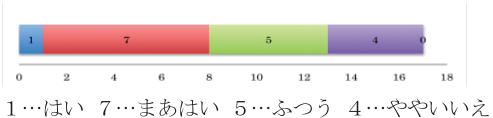
これからの図工は、つくる楽しさに合わせ、「分かる」「考える」楽しさも味わえ、子どもが学びの実感もてるように改善すべき必要があるだろう。

(2) 検証の視点②について

「トライアル」は、子どもが表現する「色」や「形(線)」に造形的な意図や工夫を生み出し、イメージを表現する上で支えとなるか

事前調査では、「自分の思い通り」に絵を描く、色をぬることは、他の項目に比べて、かなり低い数値結果がでていた。

表3) 事前 色ぬりは「自分の思い通り」の色になるか 平均値(2.71)



このことから「トライアル」が、自分の思いを表す上で手がかりとなるものを獲得できるかは、とても重要なことであった。

表4) 事後 墨の色や線で「思い通り」に表現できた 平均値(1.24)

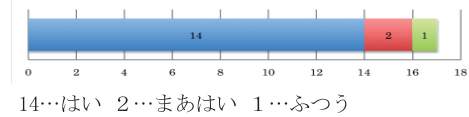


表3、表4の数値を比較すると「トライアル」が、自分の表したい感じを「思い通り」に表現する上で、支えとなったことに手応えを感じている。

このような結果につながった要因として、子どもの記述等から、「トライアル」の有効性を4つ見いだせた。

① 実際に試すことのよさ

〈実際に試すことに関わる記述より〉

- ・実際にやってみるとなかなか難しかったけど、試すうちに一目で「こんな感じ」と分かるものができてすごいなと思った。
- ・最初は思いつかなかったけれど、トライアルで試して、筆だけでもいろいろな表現方法ができた。

子どもの記述からは、「トライアル」で「実際に試すこと」によさを感じていることが分かった。

「試したこと」でイメージできにくかった技法の理解につながった事、自分の表したい「感じ」をだす方法を確実に手に入れられた事が「トライアル」の有用感につながっている。

高学年の子どもの「表現すること」の難しさは、頭では理解できる、何となくできると思っけていても、実際にはなかなか上手くいかないことである。

こうして「試す」場を保障したことは、「予想→トライ→考え直す→リトライ」という流れができ、実感を伴った理解と、墨の色や線がもつ「感じ」をつかむことにつながったと考える。子どもが自分なりに技法を解釈する上で、「試す場」を保障する事の有効性を感じた。

② 自分の表現手段が獲得できることのよさ

〈自分の獲得した技法に関わる記述より〉

- ・「かすれ」と「円」は、自分の感じをだす一番納得のいくものになった。
- ・「たたき」が一番自分のだしたい感じが表しやすかった。
- ・「濃淡」は強調がはっきり分かるので、絵を描く時に使いました。

どの子どもも、表したい感じを表すことにつながった「技法」を記述していた。例として載せた記述の「かすれ」、「円」、「たたき」、「濃淡」は、「ト

ライアル」で示した技法である。その中から表現に合うものを選択し、自分の表現手段として活用できたことがうかがえる。

こうした表現技法や方法を子どもに与えることは、作品の傾向が偏るなどの理由で敬遠されがちである。しかし、同じ表現教科の音楽は音符やリズムが、体育の表現運動にもステップといった基本形はある。すべてを任せる図工の幅広さを見直すべきであろう。

今回の実践では、与えることで、より表現が明確になる事が見いだせた。技法や方法を教えることに躊躇するのではなく、「トライアル」のように、子どもたちの発達段階や実態に応じて、図工は子どもの手段となることを与えるべきだと考える。

与えた後、どう表現させるかを子どもに任せる図工学習の必要性和有効性を、実践を通して実感した。

また、自分の工夫した点を、こうして「技法」で明確に語れるようになった事は大きい。このように「図工特有の言語」を増やしていけば、子どもが、自分の表現の意図をもっと明確に伝える事につながるであろう。

③ 形や色の「感じ」がとらえられるよさ

〈感じをとらえたことに関わる記述より〉

- ・かすれは「燃えるような火の感じ」ができそうだなと、すぐに思った。
- ・墨の線は絵になってなくてもすごく力や思いがこもっていると感じた。
- ・激しい感じをつくる時、「たらし」がととても激しさを表しやすかった。

子どもの「表したい感じ」と「活用した技法」をつないだものは、子どもなりに解釈した「技法」がもつ特徴や感じ」である事が分かる。

「トライアル」では、子どもたちが様々な技法を試した後、〇〇な感じを表す「感じカードづくり」を設定していた。教師が示す5つの「〇〇な感じ」のお題（激しい、優しい、静かな、勢いがある、不思議な）に合う簡単なカードづくりである。

「トライアル」は、技法を知る・できるようになる活動で終わらず、「イメージと表現をつなぐことを試す」活動も設定している。この活動は、その子なりの表現様式を獲得するための簡単なトレーニングであったといえよう。

この活動があったことで、子どもたちは墨で生み出される「色」や「線」に感情的イメージがあることを認識し、その感情的イメージが表現の中

の「感じ」を表す上で有効なものとなることを獲得したことにつながったと考える。

④ 他の題材でも活用できるよさ

〈実際に試すことに関わる記述より〉

- ・図工で色をぬる時や感じをだす時、どれかを使ってやりたい。
- ・今までは色を変えて工夫していたけど、濃淡を使えばもっとよくなる。
- ・苦手な絵の具も教わった技を使えば、自分の感じが表せそう。

「トライアル」で獲得した「自分の思いを表すための手段」は、この授業に限らず、他の授業でも活用できる効果があることも子どもたちのふりかえりの記述からうかがえる。今回の実践から、一題材にとどまらず、あらゆる場面で効果のあるものとなる可能性も見えている。

(3) 抽出児童の変容から見えた教育的効果

C：表現に自信がもてず、「教わること」にも抵抗があり、図工が好きでないタイプ⑧児の場合

⑧児は、発想、描く、ぬることすべてが思い通りにできないと感じ、表現に苦手意識がある。このことから、図工はきらいだと感じている。

また、⑧児は「教わる図工」に対しても抵抗感がある。「教わってもどうせ上手くいかない」というのが理由である。

「トライアル」の活動に取り組んだ結果、以下のような変容が⑧児に見られた。

○事後調査の「意欲」、「技法を知る・獲得」、「思い通りの表現」、「トライアルは役立つ」ことに関する結果は、すべて肯定的な回答だった。事前・事後の数値結果を比較すると、⑧児の意識に肯定的な変容が表れていた。

○「ウォーミングアップ」から「気持ちを表す絵」までの経緯を、⑧児の表現で見ると、線や色に多様な線や墨の濃淡を使った表現が表れ、表現内容も変容したことが分かる。



ウォーミングアップ



感じカード



気持ちを表す作品

「勢いのある感じ」

「怖い気持ち」

○記述には、自分の「表現意図」「活用した技法」「その技法を取り入れた根拠」などが述べられており、自分の表現に納得している結果が表れた。

〈⑧児の作品カードの記述より 作品名「怖い気持ち」〉

感じをだすための工夫

- ・筆…「とばし」の技で、「はげしき」をだした。
- ・テーブルほうき…薄く、ぐるぐる「かすれ」させた。
- ・モップの棒…雷のような「線」で「こわい気持ち」を表した。
- ・スポンジ…雲のような「もやもやな気持ちの感じ」を表した。

表現が苦手な⑧児のような子どもにとって、「トリアル」で自分の表したい感じをだすための手段を、実感しながら獲得することや、それを表現で表せばよいという道筋をつくってやるのが有効であることが分かった。

(4) 検証の視点③について

「トリアル」は、教師の指導や評価が明確になるか。

「トリアル」を取り入れたことで、子どもの表現の、「どこ」に目を向けるか、子どもの表現意図を、「何」を手がかりとして読み取るのかが明確になった。本実践で言えば、子どもが描く、墨の「線」と「色」である。

「トリアル」を設定する事で、「いいね」「がんばってるね」という曖昧な声かけから脱却し、「そういう意図ならこの色はもう少し考えるといい」とか、「その感じをだしたいなら、ここの形(線)は、もう少し変わってくるといい」といった、より具体的なやり取りに変わっていくことが期待される。

V 研究のまとめと今後の課題

1 「育てるべき力」のさらなる解明にむけて

本研究では、図工の学習で欠かせない、色や形といった「造形要素」や、それを使ってできる「造形技法や技術」に着目し、子どもが発想したことを表現するための手がかりとなるよう「発達段階を考慮して教える必要がある」ことを提案してきた。

そこで、「形」や「色」がもつ感じ(感情的イメージ)を子どもが解釈し、その子なりの「造形的な見方」を育てることが、図工で育てるべき力の土台となることが見えてきた。

しかし、これは図工で育てる力のほんの土台の部分にすぎず、今後はさらにその上に積み上がる力を明確にしていかなければならない。

また、どのようなものが子どもの表現や鑑賞を支える「造形要素」や「造形技法」となるのか、「形」や「色」、「構成」以外のものも明らかにしていきたい。

2 「トリアル」の実施に向けて

1で述べた力を、子どもが培うための一方法として、「トリアル」の開発を行ってきた。

今後の課題として、まずは、本研究で行った「トリアル」の実践・検証にもとづき、試作版として開発した、いくつかの「トリアル」を見直し、現場での実施に向けて改良を行っていきたい。

試作版は、子どもが経験したことがないことを想定して内容を検討している。そのために、現場での実践を通して、発達段階に対応した「トリアル」であるか、内容や方法を検証しながら、改良していきたい。

また、今後は、「立体に表す活動」や「鑑賞活動」における「トリアル」の開発も行っていく、図工の領域全般に関わる「トリアル」になるよう開発を進めていきたい。

図工で「教えること」の明確化に向け、これからは、高学年に限らず、子どもの発達段階や実態を考慮しながら、適正である時期を考慮した「トリアル」の内容を、全学年で検討していく必要があると考える。

【謝辞】

本論文の作成にあたり、熱心にご指導いただいた川路澄人先生をはじめ、島根大学の関係者の皆様には、研修の場として最善の環境を整えていただきました。また、調査対象学校の皆様には本研究の主旨を理解し、快く協力いただきました。皆様へ心から感謝の気持ちとお礼を申し上げます。

〈参考・引用文献〉

- 1) ベネッセ:「第4回学習基本調査報告書・小学校」2006
国立教育政策研究所:「音楽等質問紙調査」2007
- 2) 本田由紀:『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版 2005
- 3) 神野真吾:「実地的な教科へ」教育研究 2012
- 4) 文部科学省:『小学校学習指導要領解説図画工作編』日本文教出版 2008
- 5) 新井哲夫:「造形的な目を育てる」日本文教出版 形FORME 2012
- 6) 遠藤友麗:「文化発信社会の創造を目指す」山形県造教連web 2001
- 7) 吉田貴富:「図画工作のあり方について」研究論叢山口大学2002
- 8) 金子一夫:「美術教育が子どもたちに託すもの」欄外誌FORME 2002
- 9) 天形 健:『小学校 図画工作科の指導』建帛社2010
- 10) 新井哲夫:「なぜ小・中学校に美術教育が必要なのか」日本学校音楽教育研究会紀要 2006
- 11) 川路澄人:『小学校 図画工作科の指導』建帛社 2010